



史料館だより

第10号

1987 • 10 • 10

魚屋道と出会いつて

私が初めて「魚屋道」という地名に出会ったのは中学校の生物クラブに属し、蝶やカタツムリを採集するため六甲山中を歩きまわっていた時だった。六甲山の登山地図に、神戸市の東南の一隅、東お多福山の南方にこの名があった。西友雄一著「六甲山ハイキング」や山下道雄著「新しい六甲山」が、当時の愛読書で、その中に、この道が難地方と有馬との交易ルートで、六甲山最高峰の南、住吉川の源流に石造りの立派な本庄橋があること、この橋のたもとで交易の市が開かれたことが書かれていた。ちょうどそのころ、親子づれのハイカーが本庄橋付近で遭難し、丸一日ほどして無事救出されたニュースが新聞紙上にぎわしたのが印象に残っているが、中学・高校時代にはこれ以上魚屋道つきあうこともなかつた。

大学で西洋史を専攻していた私に、郷土史や民俗研究のきっかけを与えてくれたのは、当時大学生で子供会の世話をしていた立住隆典君という友人だった。子供たちに須磨区大手町の歴史を教えてくれたのが多分中世かいうのである。この街は私の母の一族が多分中世か

山の登山地図に、神戸市の東南の一隅、東お多福山の南方にこの名があつた。大西雄一著「六甲山ハイキング」や山下道雄著「新しい六甲山」が、当時の愛読書で、その中に、この道が瀬戸方と有馬との交易ルートで、六甲山最高峰の南、住吉川の源流に石造りの立派な本庄橋があること、この橋のともども交易の市が開かれたことが書かれていた。ちょうどそこには、夏子ちゃんハイカーブ本を寄す町道雄

ら住み続けてきた土地で、史学科の学生然としていた私だが、この時、この街かどの歴史については一言も発することができなかつた。困った弘までも申百市

マツスキ大学講師

武男宮司から、いろいろな示唆を受けた。文献に関する知識も少しずつ増え、六甲についての案内書の原点ともいべき竹中靖一著「六甲」を読む一方、芦屋市史史料編の中に、魚屋道という名こそないが湯山間道の名称で、この山越え道についての史料を見出したのも、その後まもなくのことだった。

写真館の永田照彦さん、書画家の日あてさんなど、この連続がはじき文庫として刊行されたのが昭和四十九年。史料や口碑や地名・古地図を集め、魚屋道の往來を載せたのが昭和五十六年だから、郷土史を勉強しはじめて約十年、この道を歩いていたわけである。それで、史料館で歴史的催しをしようということに至った時、深江に起點を持つこの歴史の道を見なおす催しを提案したわけである。

山岳部員がいて、よく山の話をし山歩きをした。彼は東灘区森の出身で、稻荷神社の地主曳きの祭りや魚屋道の伝承を教えてくれた。中学時代に出会ったこの山道が郷土史の研究対象として私の頭に浮かんだのはこの時だった。ちょうどその頃、神戸市の民俗芸能調査が始まり、東灘区を担当した私は、土地の古老からお祭りや芸能とともに魚屋道に関する口碑をたくさん採集することができた。ことに郷土史

史料館では、旧本庄村史を編集中であるが、その作業の中で魚屋道にまつわる新しい史料が収集されている。これについて、本号で、月望浩氏が紹介しているが、一步一步魚屋道の研究が進んでいくことは、とてもエキサイティングである。

魚屋道あるきながら —コースガイド—

四日にお祭りをしたという。現在でもこの辺りは寺「山の神」の地名で呼ばれている。

有馬温泉と灘地方を最短距離で結ぶ魚屋道。この道の深江側起点、阪神電車深江駅の北側に魚屋道の

松の地とされ、村人が喜んで踊りまわつて神様を迎えたから、踊り松の名がついた、と言われている。

登山ルートの集合点、たくさん的人が思い思いには色を眺めています。東南の方角には日本の近代登山

ここで道中の無事を祈願。そろそろ坂がきつくなります。甲南女子大学と森の山の神を左に見がう、宮川と呼ばれる川づたいにいよいよ山道になります。

(3) 雨ヶ峠・七曲がり

高さ五・八メートルの朱鳥居があります。鳥居の構内には「稲荷之社 徒足三町」と刻まれた道標も建っています。JRのガードをくぐり、さらに阪急電車の線路を越えると、先程の道標の指示どおり森林帯で、神社に着きます。

山道に入つてしまらへは、水害によつて本来の筋が崩れてしまつてゐる箇所、急斜面や沢づたい道、魚屋道最初の難関です。歩きづらいのを我慢して登つてゆくと、やがて大きな蝶岩が見えてきます。その名の通りカエルがすわつてゐるような形岩ですが、蝶岩とも呼ばれていたようです。まことに、しばしば大蛇がこの岩に巻きついていたという目撃談から蛇巣岩と名付けられた事もあります。この岩を過ぎると次は山の神にお参りしましょう。

にに関する伝説も残っています。

森福荷神社

雲龟元年（七一五）卯月卯日の夜、深江の浦の沖に光るもののが現れ波辺に流れ寄った。村人が近づいてみると、それはミコシであった。すると「われは稲荷の神である。この山の辺へ祀られば村々を守らう」とお告げがあったので、現在その地に祀ったのがこの神社の起りだと伝えられている。海からあがられた場所は深江の踊り場といふ。

春に山から下りて田の神になり、秋には稻を実らせ山に帰ってゆく、という山の神は東夷の村々ではひらく信仰されてきたものであった。魚屋道から少し右へ入る小径の奥に深江の村人（一八五八）正月の文字が刻まれてあり、一月が信仰した山の神の祠が残っている。安政五年

こうして「魚をやり過」とした若者は、「いつもの魚のお札に狼から私の身を救ってくれたのか」とそれからも余った魚を山犬に与え、やり続けた。『南民のタラフ』(ころへぢ伝説の太甲山)より

時代から使われていた灌漑用池です。登山道に近い方が堰池、それより奥の池は離池です。またこの道沿いに「水ノミ場」の地名も残っており、昔はそこに清流がある、のどをうるおしたのでしよう。他にも字「煙の場」は尼崎藩の獎勵によって開墾が行なわれようとした場所、と言われています。文化二年（一八〇五）、「煙の場」の再開発問題が持ち上がり、当時の史料が残っています（本庄村史資料編第二卷参照）。

道は芦屋カントリークラブゴルフ場を横切る辺りから再び急坂になってきます。風吹岩から一時間あまりかかって坂を上りきり、雨ヶ峰に到達します。ここではかわいいイノシシの親子に出会えるかも。

振返って眼下の景色を見るもよし、イノシシと遊ぶのもよし。少し休憩したら下り道、東お多福山の美しいスキを見ながら本庄橋へ向かいます。

雨ヶ峰を下ったところで西からくる住吉川に合流し、住吉川に沿って北へ歩いた小さな広場がかつて本庄橋がかかる場所です。この橋の付近はかなり広い河原であり、昔は有馬と灘の人々の物資交換の場であつたと伝えられ、この本庄橋も有馬と東灘の交通がさかんだった時期に本庄の村々の人によつて掛けられたものなのでしょう。しかしこの石橋も昭和五十年頃のある日、自然崩壊してしまい石材の一部も流出してしまったので、その代りに広場を作り、橋の由来を書いた説明板を設置し、橋石を置いて昔の姿をしのばせています。

さあ砂防ダムを越えたら、いよいよ七曲がり、魚星道登山のハイライトです。かなりきつい事は確かですが、今迄の道程で山道慣れてしまい、案外ス

イスイ登つてゆく人も。山頂から下りてくる人に勧まされるながら、くねくね登ること四十分。土の道がいつの間にか舗装された道に変わっている事に気付いたら、もう山頂は目前です。

(4) 六甲山頂（有馬）

深江を出発して約五時間あまり、ようやく六甲山頂、一軒茶屋に到着します。六甲最高峰は標高九三一・三四メートルで現在は米軍無線中継所が置かれている立ち入ることはできません。ドライブウェーを注意して横切り、あとは一時間の下り道だけです。射場山をひざを震わせながら下りてゆき、木々のあいから温泉の湯けむりが見えてくると、やがて目的地有馬に到着します。登山道の終点にあたる地点に毎日新聞社によって建てられた石柱があります。

六甲山頂上ニ到ル 三七二六メートル



住吉ニ到ル 一二四一三メートル
という字が刻まれています。これと同形態の石柱が阪急六甲駅の南側に立つており、六甲山頂を中心として表側（遷）と裏側（有馬）から山頂への距離を示しています。この辺りの谷は昔、炭酸ガスが噴出していた場所であり、近くいた鳥や虫が次々に死んだ、というので地獄谷と呼ばれています。その炭酸ガスが発生していた穴は鳥地獄・虫地獄として形だけはとどめおり、昔は有馬の名所の一つになっていました。

こうして無事、有馬にたどり着きました。バスで帰るか、電車で帰るか、それとも温泉に入つて汗を流してゆきますか。

（文・山本文雄／絵・伊東玲子）

荷着場としての畠の場の開発

一、はじめに

今年も十月十日体育の日に、史料館友の会主催の行事として、「魚屋道を歩く会」が行なわれる。男女数百人が、深江から六甲山最高峰を経て、湯の馬有馬へと下つて行く。六甲を東西に行く「六甲縦走」が有名であるが、この六甲山を南北に横断する

この行事もだんだんと定着してきた。今でこそハイカント通る道筋であるが、かつては深江の浜でとれた魚を有馬へ運んでいたという。そのためには「魚屋道」と呼ばれていた。だが、この道も逝世には、「湯山間道」と呼ばれ生瀬・小浜などの宿駅と論争をくり返してきた。この論争の歴史の様子は、田辺真氏が「魚屋道の往来と近世東六甲の山越え交通史」(『歴史と神戸』No.108、昭和五十六年十月一日刊)に所収。後に昭和五十七年十月十日、深江財産区管理会より抜刷、復刊される。詳しく述べている。

本文は、田辺氏の了解を得て「魚屋道の往来」を踏襲しながら、本庄村史資料篇第二巻に収録している。

【26 街道荷運場開発につき返答猶予の願書】
 【27 街道荷運場開発願書】
 【28 街道荷運場開発につき願書】

史料館研究員 望月 浩

人々の様子を書き進めて行きたいと思う。

二、正徳の駅法改正前の論争

近世に入り、慶安年間(一六四八～五二)頃になると、諸物資の流通状況が活発になってきた。そこでこの荷物をめぐつて、各地で紛争が起きてきた。

寛文十二年(一六七二)に、生瀬(西宮市・西宮・小浜(宝塚市)・小屋(尼崎・伊丹町・伊丹の馬借)たちが、湯山間道の通行の禁止を大坂町奉行所に出願している。

元来、瀬地方から有馬へは、芦屋・西宮を通り、北へ向かって生瀬・舟坂を通るか、尼崎・小浜を通り生瀬舟坂を通っていた。(この西宮から直接生瀬へ行く道筋と、小浜通り生瀬へ行く道筋で論争が行なわれた。)

だが、瀬地方と有馬を結ぶルートとしては、大きくなり道である。そこで、六甲山を直接越える山道が利用されるようになつたのである。しかし、この山道を利用されると、生瀬等宿駅側にとつては大きな打撃となるので、通行禁止を訴えた。

だが、正徳の駅法改正の前であつたので、宿駅側は「新儀迷惑」と唱えるだけであつた。

やがて元禄期(一六八八)になると、海上交通を新たに史料に用い、近世における魚屋道をめぐる

三、天明年間の紛争

正徳の駅法改正で決められたのもかわらず、問道通行は続けられた。天明六年(一七八六)に、

本庄丸・村(森・深江・青木・三条・津知・北畠・中野・小路・田辺)が、同年夏の大雨で破損した湯山間道の修復を決めた。そして、六甲への荷物の運搬は使う牛の数を村毎に決めていた。だが、これはすでに駅法改正で勝手道の通行が禁じられており、青木浜から湯山(有馬)への往来の事実を見つけた宿駅側の商人の抗議で差し止められた。

しかし、その後も有馬への湯客がふえるにつれて日常諸物資の消費もふえた。それにつれ、湯山間道は拡張・整備され、旅人・物資を通行させていた。

四、畠の場の開発

文化二年(一八〇五)八月二十九日に、森・三条・津知・中野の庄屋から、尼崎藩の役人に畠の場の開発の申請が出された。この畠の場といふのは、東お

多福山の南麓一帯で、現在ではゴルフ場一帯である。

また、本庄から有馬までの直線距離にして約三の地點である。

『本庄山之内字烟之場と申處、凡百ヶ年余ニも相成候哉……右烟之場と申處二山平御座候ニ付、御地頭より御見立ニ面、新聞御座候處、如何様之義ニ而出来不申候』

と、本庄山内の烟の場という所が、百年余前に領主の見立で開発をしてみたが、なぜか完成しなかったと述べ。

『當村より五、六町程東北ニ相当り、北烟村と申より有馬通路之山御座候處、至而細道御座候處、凡式拾年以来折々遣いたし、當時は、少々荷物之候ハ、三田井在郷より牛馬之通路も相成候而追々は當邊へ出荷物も到來可申』

つまり、北烟村から有馬へ通じる山道がある。こ

れは細い道で、二十年前から時々道を造り、少しの荷物の往来を行なうことができた。なお、この山道

にもつと手をかけられ、三田や近辺の村々からの牛馬の通路になる。ゆくゆくは、ここらあたりへ着く

荷物も出てくる。そして、

『此度新聞御座候處、御開済被成下候ハ、右出荷物新聞煙之處既ニも可相成。左候得ハ助精も御

座候ニ付、追々は人家も出来可申義ニ存候』

と、この度の烟の場の開発の願いを聞き入れて下さ

れば、荷物の中継地として利用ができる。収入の助けにもなり、だんだんと人家もできてくる。と、烟

の場の開発の必要性を訴えている。

すでに、湯山間道が違法であるとされているのにもかかわらず、領主に六甲越えの許可を、開発によ

る益を訴えれば得られると思つてゐた。これは、自分たちの開発や六甲越えの通行が不法だと思つてゐるためのものなのか、知つていて、開発という名

の陰に六甲越えの交通を行うためのもののか意見が分れるところだが、文中に、開発によつて荷物の往来が増えてくる、と書いてあるところを見るに、前者であろう。

なお、この史料は、「本山村誌史料編」一六六・一六七頁の史料七十四号と同じ内容で、中野村の庄屋の四郎右衛門が、

『他之庄より右新聞煙之願書年、御座候故寫取置申候』

と、書き写したとしている。從来この七十四号史料

は、明治以降の史料とされていたが、「本庄村史資料編第一巻」の編集の過程で、文化二年のものと分かつた。

これに対し尼崎藩が、どんな対応をしたのかの史料は見つかっていない。しかし、文化二年閏八月二十四日、森村など四ヶ村の庄屋が改めて、次のように願書を差し出した。

『字烟之場新聞起之儀御願奉申上候處、此節外村々差支無之儀と御尋御座候ニ付、庄内相互ニ掛合も仕候得共、今少々然談難行届候ニ付、爰暫之間何卒御猶予被為成下候』

つまり、開発願書を出したが、藩から「外の村の支

障はないか」と尋ねられたので、本庄九ヶ村で話し合つたところ、もう少し時間がいるので待つて欲しきといふのである。これから考へると、尼崎藩は、

他の村からの反対がなければ開発を認める可能性があつた。しかし、話し合いがすんなり運ばなかつた

ことからして、他村からクレームがついたのではあるまい。

また、この烟の場の開発をめぐっては、同年、北

烟村の助左衛門・七兵衛の二人が、六甲越えの道を正規の有馬道にしようと、本庄九ヶ村の合意を得て、一軒に一人の人足を出して道筋を整備した。出来たところで今度は、北烟村と田辺村が、烟の場の開発を計画、山路庄田中村の彦右衛門に、

『本庄山之内烟の場と申處開発致、有馬通諸荷物次場に致度、又は右場所迫々開発致度旨有之候哉』

と、掛合つたが、残る本庄七ヶ村にこの話が伝わり、

反対論がて、同年十一月、本庄九ヶ村からして大坂町奉行所と尼崎藩に願書を出すことになった。

他の庄の村々が北烟と田辺の烟の場開発の抜け駆けを許さなかつたのである。

また、しかも

『他之庄より右之場所相應候處には、猶々差支候故急々書付相認メ』

としており、他庄の動きに神経をとがらせている。

後に、住吉道との合流点になる本庄橋付近の前ま

では、この烟の場が湯山間道にとって、重要な地点になつてゐたと言えるだろう。

五、その後、幕末までの紛争

こうした烟の場の開発の動きに対し、翌文化三年(一八〇六)になると、小浜・伊丹・生瀬・尼崎の宿駅商人たちが、湯山間道について湯山町と本庄九ヶ村を相手どり、新規の道を切り広げるのをやめてほしい、と訴えた。この時の争論の内容は、田辺氏

の論文や、「本庄村史資料篇第二卷」にくわしいが
ざいたいの内容は次の通りである。

宿駅側の訴えは、

○柴草を運ぶ細い道を、偽って大幅に修復した。ま

た。道標までつけていた。

○湯山一瀬の間を生か荷物を積んで行きました。
○間道利用が続んど、宿駅の公用通行の役目にも支
障をきたす。
などである。これに対して本庄側の回答は、
○この道は以前からあつたもので、新道ではない。
天皇が御幸したこともある古道である。



○山仕事や石宝殿の参詣に道を利用することはあっても、宿駅の差し支えになるような荷物の往来はない。

二〇四

などである。この論争は、宿駅側が譲歩した形で、灰色のまま決着した。

こうして、幕末まで論争は続いたのである。

⑦ 同右

①この論争については、八木哲造「近世の宿駅争論」

(近代) 第七号 神戸大学所収 に譲り

②本庄村史資料篇第二卷一 一五頁

開発願書

334 **卷三**

⑤本由村史資料篇第三卷一頁

—26—

街道荷蘭村

開発につき返答贈予の願書

⑥ 本田村史資料篇第三卷一八頁 28 街道傳續

開発につき覚書



ニーキーランドの国益日本研究センター初代研究官になった高校教師田辺真人さん

ス、ニードルマンの日本語教員対象の研修講演会設営の仕事が持っている。
「3年間の実験ですが、岡田の
9月20日
講師兼日
。史料館
まります。
美研究員
した。

けられている。
日本研究セミナーは、日本文化、日本思想などの講座を開いたマラフス。今月一日、設置された。ところだ、一人のスタッフ、十日間。永遠の奥地入り。すぐに日本研究者や専門家の人たちへの情報提供によ

の田立
本文学な
大学に
いまのと
今月一
したく、
で助言す
ドバイ

信教育学校で一年間、日本を経て帰国された。『本業、以外に』、『精神の旅』で、どうやつおもて文化の紹介、日本の紹介をして貢献された。本業や文化について語るときに、常に個性と感動的な要素が見られ、今更ながら大きな印象を受けた。

田辺眞人氏は、県立御影高校を退職し、9月20日
ニュージーランド国立マッスィー大学専任講師兼日
本文化センター研究官として赴任しました。史料館
の館長は辞任しましたが、理事として止どまります。
なお、後任の館長は当面置かず、大國正美研究員
が、史料館理事兼館長職務代行者となりました。

神戸女子薬科大学構内古墳

史料館研究員 藤川祐作

魚屋道の起点付近にあたる神戸市東部、芦屋市との境から住吉川間には、かつて、森・中野・岡本三グループの古墳群が知られていたが、今日では、今紹介する森の神戸女子薬科大学構内古墳(通称生駒古墳)のみが現存するだけである。なお、昭和四十八年(一九七三)に、神戸大学考古学研究会の手によって埴丘石室の測量調査がおこなわれている。

又、同古墳出土と伝えられる遺物が同大学に保管されおり、昭和三十九年(一九六四)十二月に、同構内足草園造成のおり出土した銅鐸調査と平行して、宍湖と観察が尼崎貞子女史と村川行弘氏によつておこなわれた。

以下、尼崎・村川報告と昭和五十六年(一九八一)発刊の神大考古概要をもとに述べてみる。

外形はすでに、自然、人為的にかなり封土がうなわされているが、直径一七㍍前後の円墳と考えられている。(第1図)。

内部は、南向きに開口する無袖式(長方形)の穴式石室で、奥壁・天井石・側石共に良好に残っている。使用石材は、花崗岩と石英粗岩が五分五分で使われているようである。

さて遺物についてであるが、尼崎・村川報告では、神大報告では、須恵器七点・銅鏡一点・鏡片若干・完形品破片などを含せ二三點があつたようであるが、

鉄器数点となつていている。なお、尼崎・村川報告には、鐵器についての報告はない。かなりの遺物が、何らかの理由で紛失しているようである。これを機に、史料館へ寄託展示の方向で考えてみたい。

須恵器(1~12)

环蓋(1~6)

1・2・3・4・6は口縁部外縁は丸味をおび、1・2・4・6は内縁は浅く、4・6はかたちのよい宝珠つまみで、2・4以外は焼成良。

环身(7~10)

7は内側へ弯曲した口縁部をもち、8・9・10は丸味のある口縁部で、7のみが焼成良。

高环脚部(1)

脚に二本の沈線があり、内部に手ひねりのあとをのこし、腹部と脚は別つくりで、接合したあとをのこす。焼成良。

長頸蓋(12)

丸味のあるV状の口縁部で、頸部に二条の沈線をもち、肩部の張りは上部はやや直線的で下部は丸味をもつ。胴張部に二条の沈線、その間にヘラ状斜行年張文、底部は丸底に近い。口頭部と胴部は別つく。

高环脚部(2)

脚に二本の沈線があり、内部に手ひねりのあとをのこし、腹部と脚は別つくりで、接合したあとをのこす。焼成良。

青銅鏡(13)

高さ三・四㌢・口縁径八・〇㌢・底径四・一㌢を

計り、口縁部は外へ朝顔形に広がる。
以上が遺物についてである。

古墳のつくられた時期は、石室の形態、須恵器から六世紀紀末から七世紀前半と考えられ、銅鏡は後代にもちこまれたもので、古代以降のものと思われる。

最後に神戸大学考古学研究会には、同墳が神戸市域の六甲南麓で残る唯一の横穴石室であることから、一日も早い本報告書の発刊を切望するものである。

なお、古川久雄学友には、圖作成(手をわざらわせた)記して感謝にかえる。

付記
初稿は正中に鉄器の実測図が提供されたが、紙面の都合と須恵器の実測図が一部不足しているようだ。次号に合せて補足報告をしたい。

本庄村史資料編 第二卷

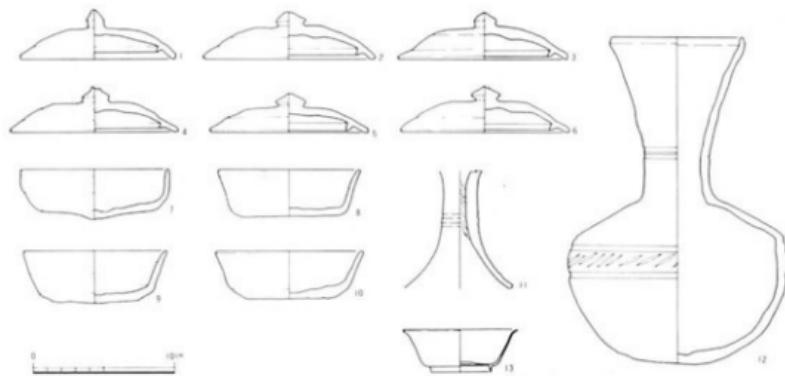
近世農政・民政史料

神戸灘江生活文化史料館では、五十五年から、田本庄村史の編纂を始めています。神戸市東灘区を構成する御影、住吉、魚崎、本山、本庄のうち、本庄村史だけが、久しく待望されながら未刊でした。本卷では、魚屋道の新出史料を始め、法令、年賀、村政、山論、夫役など六項目三十三点の史料が収録されています。史料だけでなく、最新の学界の成果を取り入れた分かり易い解説があり、気軽に読みます。A5判、百五十頁。

友の会会員 八百円、一般 千円。



第1図 神戸女子医科大学構内古墳 地形実測図



第2図 出土遗物(1~12須恵器・13青銅器)

夏の特別展 戦時下の生活文化史を企画して

史料調査員 望月友二

一、はじめに

本年度の特別展第二弾として、今夏「戦時下の生活文化史」を開催した。戦時下の国民の苦しかった生活を知り、また思い起こして、忘れ去られようとしている戦争の悲劇を今一度考え直し、若い世代の人達にも理解してもらおうというねらいだつた。

特に「戦時下の生活文化史」という事で、戦時中人々はどのような生活を営んでいたか、という点に着目し、生活文化という面からアプローチしているのが特徴である。

展示したのは史料館の所蔵品約三十点、そして西宮市立郷土資料館の御好意によりお借りした、鉄カブトなどの戦争資料十一点、芦屋市教育委員会所蔵の空襲直後の深江近辺の写真数点である。期間は八月十五日の終戦記念日をはさんだ、八月一日から九月三十七日までの二ヶ月間。史料館三階のクリオ・ルームを会場にした。

二、展示品について

展示品は、戦時下に人々はどのような生活を送っていたかをテーマにしているため、特に生活に関する資料を数多く展示了した。

衣料切符や国民服・モンベなどは、当時物資の不足により、衣類に厳しい統制が行われた事がよくわかる。また人々は生活をしていく上で、あらゆる

面で戦争の影響を受けた。愛国百人一首絵ハガキや戦意を高揚させるレコードなど、娛樂や文化の領域にまで、戦争色が色濃く浸透している。

また、ガレキの山と化した空襲直後の深江近辺の貴重な写真や、昭和五十七年沖縄南部糸満市郊外で掘り出された、沖縄戦の遺品の水筒や切り込み隊員の地下足袋などは、一体、だれのための戦争か、いかに戦争が非人間的な行ないかを、最もよく語りかけてくれた。

この様に今回展示したものは、それぞれが戦争の悲惨さを込めたものばかりで、戦争を知らない世代の私達にも、その当時の生活状況を通じて、改めて戦争とは何かを考え直す機会になつた。

この特別展が始まってから、戦争に関する資料を寄贈してくれる方が多くなってきているが、この事から見ても、今回の特別展の狙いは、ある程度達成できたのではないかと思つてゐる。

私は、この特別展を企画した時から、一回限りで終わらせないことを申し合わせた。続けることが大切だと思うからである。また、特別展の期間中だけ、戦争のことを考えればよいというのもではない。当面、長期的に取り組みたいのは、戦争体験、戦時下の生活体験の聞き取りと振り起しである。同じ歴史事象でも、体験した人の境遇で異なるため、さまざまな世代の方から、聞き取りを行ない戦時下の生活史を多角的に記録していくたいと思う。今後も、資料の提供や聞き取り調査への参加など、ご協力、よろしくお願いします。

三、戦時下の生活の思い出

今回の「戦時下の生活文化史」の展示とは別に、史料館友の会の戦争体験者、そして特別展を見学にこられた方々に、戦時下の生活の思い出という、アンケートをお願いした。その当時の人々の苦しかった生活、私達若い世代には、想像つかない生活が

四、おわりに

八月から九月末までの二ヶ月間、暑いなかにわたくて開催された特別展だが、その間、新聞、テレビなどで特別展の事を知られた方など、その他大勢の人々が見学に来られた。改めて反響の大きさに驚くとともに、この特別展を開いたことの重要性を感じている。

最初特別展を開く前、私達戦争を知らない若いスタッフが、戦争展という企画を行なつても、はたして本当に当時の人々の苦しみというものが正しく理解でき、そして見学に来られる人達に伝わるだろうか、という危惧があつた。しかし見学にこられた多くの人々やアンケートの内容を見るうちに、いらざる心配だつた、と安心するとともに、充実して雍容していかねばならないと、責任も感じてゐる。

私は、この特別展を企画した時から、一回限りで終わらせないことを申し合わせた。続けることが大切だと思うからである。また、特別展の期間中だけ、戦争のことを考えればよいというのもない。当面、長期的に取り組みたいのは、戦争体験、戦時下の生活体験の聞き取りと振り起しである。同じ歴史事象でも、体験した人の境遇で異なるため、さまざまな世代の方から、聞き取りを行ない戦時下の生活史を多角的に記録していくたいと思う。今後も、資料の提供や聞き取り調査への参加など、ご協力、よろしくお願いします。

新聞にみる 史料館

平和の大切さ かみしめて

花園大・望月さんら5人が企画



若者の来館者が多い「戦時下の生活文化史展」

戦争の悲劇 今一度考え方直そう



国民服や戦死公報など貴重な資料60点

期間中販売したパンフレット(百五十円)は、
史料館で常時発売しています。

戦争を語りつぐ特別展は今後も続けます。
体験などをお寄せ下さい。

▲毎日新聞 8・13

苦しい当時の生活しおぶ

「戦時下の生活文化史」展

神戸深江生活
文化史料館

この時期を語るうえでは非常に重要な資料が収められています。戦争の悲劇を記録する貴重な資料が、多くの人々に見られる形で展示されています。

兵庫県の民衆の少しある生活の現状、または昔の記録として、見る者たちに心を打つものがあります。また、戦争の悲劇を記録する貴重な資料が、多くの人々に見られる形で展示されています。

兵庫県の民衆の少しある生活の現状、または昔の記録として、見る者たちに心を打つものがあります。また、戦争の悲劇を記録する貴重な資料が、多くの人々に見られる形で展示されています。

神戸新聞 8・2 ▶

◆史料館友の会の主催する「魚屋道を歩く会」が五周年を迎えました。六甲山最高峰を横断する十三キロのコースで、日頃運動不足の小学生などに之っては相当こなえる運動量です。しかし、毎年百人前後の方がご参加下さり、しっかりと定着してきたように思います。◆各新聞や本紙で紹介された通り、田辺眞人氏が館長を辞任してニュージーランドへ飛び立ちました。田辺氏の名ガイドを楽しみに参加いただいていた方には、まことに申し訳ない。参加者が多過ぎて、途中で解説することもできないので、今回は、魚屋道を特集し、コースガイドも加えました。歩きながら読み、また思い出して読んでもらえたる幸いです。◆田辺氏の離日もさることながら、史料館に集っている仲間が、進学、就職などの転機を迎えています。このままでは、史料館の運営がたち行かなくなる心配も出てきました。どうか、有償ボランティアという形で協力していただける方がありましたら大切なことは、私たちはやらされているのではないということです。いうなれば、自らの存在の証として作業を重ねているわけで、その意味では自分のための運動である、ともいえます。◆ここに集うたったちが、仲間づくりを通して個性を豊かにし、自らを磨く自由な場にしたい、というのが、私の唯一の願いです。◆町角にある市民手作りの博物館。一人一人のともに明かりはささやかですが、二本、三本と集めることで、大きな炎にしたいのです。

資料寄贈者ご芳名(七)

和162年3月以降

大日神社奉賛会・どん／大塚康弘・神戸市カルタ／寿喜賀智子・徳利、稍忙他38点
橋本宏子・首せかえ人形他10点／尾形彌・さおばかり他2点／清水沼了・航空写真51枚／村上廣治・大日本傷痍軍人会活動記録／若林伸和・軍隊手帳他11点
西村重雄・鉄カット／今林證子・買電報／大國正美・書籍／望月浩・書籍／尼崎市立地域研究史料館・書籍／金田謙・書籍／田辺健人・書籍／西宮郷土資料館・書籍・兵庫県博物館協会・書籍

研修会への館員派遣

S62.4.25
兵庫県博物館協会第21回総会・研修会
創立20周年記念表彰・昭和62年度総会
見学 特別展「華ひらく大名文化」
徳川美術館の名宝】
講演 「大名とその道具」
徳川美術館・館長 德川義宣氏
〔派遣議員 調査員 道谷卓〕

史料館日誌抄

老舗喫茶店 川口さつき

- S62年

3月1日 春の特別展「郷土玩具に見る生活文化史」(5月31日まで)

4月19日 友の会 第39回例会 (参加者 87名)
史料館開設6周年記念・友の会総会

25日 東灘小学校6年生 (見学者 34名)
本庄中学校2年生 (見学者 42名)

5月2日 東灘なんでもまつり協賛
「深江北町道跡展」(6月14日まで)

8月 東灘小学校6年生 (見学者 220名)

9日 福池小学校6年生 (見学者 147名)

24日 友の会 第40回例会 (参加者 110名)
バスツアー「吉備路の旅」

6月28日 友の会 第41回例会 (参加者 34名)
神戸開港120年記念講演会
「駿馬・大輪田の泊から兵庫の津へ」 田辺眞人氏
「生きた近代建築博物館 神戸」 鶴田勝次氏

7月15日 大阪信愛女子短期大学 (見学者 47名)

19日 友の会 第42回例会 (参加者 53名)
バスツアー「小京都 出石と銀山山野の旅」

8月1日 夏の特別展「戦時下の生活文化史」(9月27日まで)
3日 花園大学民俗学ゼミ4回生 (見学者 15名)

9月13日 神戸市学会研究例会 (参加者 36名)
「駿馬神社について」 落合重信氏
「検証・坂本龍馬の書状」 土居晴夫氏

| 協力団体 | | 神戸市教育委員会 | | 芦屋市教育委員会 | | 立神中学校 | | 立神幼稚園 | | 立神幼稚園 | |
|---------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 明石市立森林植物園 | 明石市立天文学博物館 | 神戸市立美術文書博物館 | 神戸市立美術文書博物館 | 神戸市立美術文書博物館 | 神戸市立美術文書博物館 | 東灘区役所 | 東灘区役所 | 東灘区役所 | 東灘区役所 | 東灘区役所 | 東灘区役所 |
| サンマリス会 | 大丸百貨店 | 神戸市立美術文書博物館 |
| 武陽史学学会 | 日共印刷 | 御影高校地盤部 |
| 日本青年協議会 | 信濃川中視光課 | 深江青少年協議会 |
| 神戸シヨウセイカンセンター | 神戸市立美術文書博物館 | 立神中学校 | 立神幼稚園 |
| 史科館員・役員 | 事務局員 | 研究員 | 調査員 | 幹事会幹事 | 友の会幹事 | 太田正雄 | 太田正雄 | 小堀悦麿 | 志井保治 | 志井正夫 | 坂上相三郎 |
| 大塚 | 大塚 | 大塚 | 大塚 | 山本道谷 | 山本道谷 | 喜康 | 喜康 | 祐作 | 信三 | 正美 | 正雄 |
| 佐藤多男 | 佐藤多男 | 佐藤多男 | 佐藤多男 | 佐藤春雄 | 佐藤春雄 | 弘治 | 弘治 | 浩 | 祐作 | 正美 | 正雄 |
| 多納 | 多納 | 多納 | 多納 | 佐藤春雄 | 佐藤春雄 | 文雄 | 文雄 | 幸 | 信三 | 喜康 | 喜康 |
| 兵藤光 | 兵藤光 | 兵藤光 | 兵藤光 | 吉川一 | 吉川一 | 相原 | 相原 | 小堀 | 伊東玲子 | 西村 | 西村 |
| 佐野久美 | 佐野久美 | 佐野久美 | 佐野久美 | 吉川一 | 吉川一 | 友二 | 友二 | 一郎 | 美知留 | 義宣 | 義宣 |
| 田辺ゆかり | 田辺ゆかり | 田辺ゆかり | 田辺ゆかり | 吉川一 | 吉川一 | 正民 | 正民 | 一郎 | 大介 | 正民 | 正雄 |
| 大川 | 大川 | 大川 | 大川 | 前田喜 | 前田喜 | 喜 | 喜 | 一郎 | 玲子 | 義宣 | 義宣 |
| 佐藤 | 佐藤 | 佐藤 | 佐藤 | 佐藤 | 佐藤 | 雄 | 雄 | 一郎 | 大介 | 正民 | 正雄 |
| 春雄 | 春雄 | 春雄 | 春雄 | 佐藤 | 佐藤 | 卓 | 卓 | 幸 | 吉川 | 吉川 | 吉川 |